中北海道 現代俳句協会

会報 103号

令和7年 3月25日発行

発行人 五十嵐 秀彦
発行所 中北海道現代俳句協会
〒〇六四―〇九五二 札幌市中央区宮の森二条八丁目一の一八 Fよしと方
TEL 〇一一―六四一―一〇〇七
編集人 青山 酔鳴
〒〇六一―一三四五 恵庭市島松旭町四丁目九の一
TEL 〇九〇―三三九八―三四五七

迷句・迷想そして迷走

中北海道現代俳句協会会員
江草一美

句を作り出して四十五年にもなるが、未だ迷路の中にいる。

これこそ自信作と投句してみるが全然相手にされないことも。往生際の悪い私は、別の句会に出してみるとまずまずの結果が出たりする。それが迷路の始まりでもあるのだが。

さて、現在私の係わっている句会は五ヶ所。そのいずれも句会の運営が異なる。昔ながらの、当日短冊で投句し、集まった者が匿名のまま分担して清記し、それを回しながらの選句、合評となる句会。また、事前投句し担当の方がプリントして、当日各人がその中から選句する会や郵便利用の通信句会など。中でもこの上なく便利なのはスマホ利用の句会であろうか。

投句期間中であればいつでも訂正、変更が効く。バスの中であろうが、寝転んでいようが投句も選句も選評も自在である。多忙を極める現代人にはうってつけの句会ともいえる。この運営で俳句人口も増えていくのかもしれない。だが、今一つ、その句会の空気感が薄い。顔を合わせ、お互いの息遣いを肌で感じる昔の句会に私は軍配を挙げたい。何せ私は往生際が悪い。

因みに、私の好む句会も明治に入ってからのこと。それ以前は連句の会、歌仙をまくという代物であったとやら。北海道では江戸時代末期、松前や江差で行われていたようである。箱館戦争で亡くなった土方歳三は、俳号を豊玉と名乗り、『豊玉発句集』を遺している。五稜郭に籠りながら、榎本武揚らと歌仙を巻いていたのかもしれない。

その頃四国松山で産声を挙げたのが正岡子規。彼の旺盛な知識欲、行動力、それに加えて新聞という媒体が、彼の構想を広げる手段であったろう。そんな彼の求心力は人並み以上と言える。晩年の彼の枕元には多くの才人が集まっている。この子規の確立させた「俳句」にこの私も填まり、迷い道を歩いているのである。

先頃、某所で一冊の本と出会った。烏谷征良著『植物〈意外〉歳時記』である。装丁のデザインに一目惚れ。表題通り意外と面白い。〈とは言われているが、はて〉と切り込み、好奇心を駆り立てられ一気に読ませて頂いた。

秋の七草の項では、山上憶良の歌、「芽子（はぎ）の花尾花葛花瞿麦（なでしこ）の花女郎花また藤袴朝貌の花」からきたというが、万葉の時代日本にはまだ朝顔は渡来してはいない。昼顔か桔梗ではないだろうか、との説。

花の名にしても時とともに移り変わりがあるようである。芭蕉翁の言葉を借りると「不易流行」とでも言おうか。

私など大河に流される一葉でしかないとは充分承知ではある。それでも、AIに世の中が席巻されてしまう時代が来ようとも、万葉の人々が詠ったように、庶民も自然を愛で、日々の生活の機微や愛しい家族との触れ合い、恋しい人への思いなどを託した「詠う」という表現方法が存在していることを願ってやまない。誠に往生際が悪い私である。

（えぐさ・かずみ　歯車・草木舎）

中北海道現代俳句協会総会の記

中北海現代俳句協会事務局長
F よしと

R7. 2. 1（土）
於 かでる2・7 730室

本年の二月一日は例年より降雪量のない穏やかな日となり、会場の「かでる2・7」には会員二五名が参集し定期総会開催に至った。

事務局長Fよしとの司会にて例年のとおり総会を進行。式次第に沿い、前年度亡くなられた方々に追悼の意を込め黙祷を捧げたのち、五十嵐秀彦会長より開会挨拶があった。昨年七月に辻脇系一前会長が急逝されるという大きな悲しみがあったこと。私たちはその遺志を継いで、今後も従来の俳句大会、俳句研究交流句会、新たなイベントとしての「俳句カフェ」開催などの取組みを一層強化することなどが話された。引き続き会員数一〇五名に対し出席者二五名・委任状五二名合計七七名で本会の議決権成立報告後、会場より石井美智子氏が議長に指名され議事を進行した。内容は令和六年度事業報告及び決算についての説明があり、監査委員齋藤雅美氏から監査内容についていずれも適正であるとの報告がなされ議決承認された。次に新年度計画と予算案ついても全会一致で議決承認された。

また、本年は役員の改選年度のためこれの審議に入った。選考委員として田湯岬氏、石川美智子氏、齋藤雅美氏の三名を事務局推薦で選出し、別室にて協議。協議終了後齋藤雅美選考委員より選考結果の報告があった。内容は会長に五十嵐秀彦氏の留任、副会長に瀬戸優理子氏、松王かをり氏の二名の新任、事務局長のFよしとの留任及び監査役の平尾知子氏の退任と江草一美氏の新任、また前任の副会長石本雪鬼氏と亀松澄江氏には参与として今後の会運営に助力をいただくことになった。これにて総会を終了。その後はホテルポールスター札幌での新年交流会に移り、二四名の参加者でひとときなごやかに懇親を深めた。

（えふ・よしと　アジール・ペガサス）

令和７年度中北海道現代俳句協会　事業計画（案）

日　程	事　業　計　画	
1月26日(日)了	第25回中北海道現代俳句賞 選考委員会　かでる２・７にて開催 応募総数22編＜受賞作「すこし後ろ」・Ｆよしと氏に決定＞	組織活動部 顕彰係
2月1日(土)了	令和７年度定期総会　かでる２・７、新年交流会　ポールスター札幌にて開催	事務局
4月6日（日） 実施予定	第34回中北海道現代俳句大会　かでる2・7、懇親会　ガーデンパレス札幌（予定） 講演　古家昌伸氏（北海道芸術文化アーカイヴセンター代表）演題　「未　　定」	事業部
8月30日（土） 実施予定	俳句研究交流句会　かでる2・7　札幌市中央区北2西7	組織活動部
日時未定10～11月 実施予定	俳句カフェ　かでる2・7　札幌市中央区北2西7	組織活動部
8月より	第26回中北海道現代俳句賞 募集開始　締切12月15日（月）当日消印有効	組織活動部 顕彰係
その他	会報第103号・104号・105号(3・7・12月発行)「一人一句集」3月発刊（今号同封） 幹事　会年6回（奇数月）／三役・顧問・中北海道現代俳句賞選者の会　年1回実施予定	広報部 事務局

役員・幹事構成（五十音順）

役　員

会　長	五十嵐秀彦	
副会長	瀬戸優理子（新）	松王かをり（新）
事務局長	F　よしと	
監　査	齋藤　雅美	江草　一美（新）
顧　問	永野　照子	横山いさを
参　与	石本　雪鬼（新）	亀松　澄江（新）

幹　事

会　計	高島　葉子	
総務部	阿部　満子	菅井美奈子（組織活動部顕彰係兼任）
事業部	遠藤由紀子	中田　琢志（総務部兼任）
組織活動部	及川　和弘（新）	近藤由香子
	鹿岡真知子	中田真知子
広報部	青山　酔鳴	廣田　和久

中北海道現代俳句賞選者

五十嵐　秀彦
石　川　美智子
齋　藤　雅　美
瀬　戸　優理子
松　王　かをり

会員動向

〈入　　会〉
平岩　眞美・佐藤　公子
村　　一草

会員数106名（R7年３月現在）

第25回 中北海道現代俳句賞受賞作品

受賞者　Ｆよしと氏　プロフィール

1950年　札幌市生まれ　札幌市在住
2010年　ＮＨＫ文化センター札幌にて
　　辻脇 系一先生より俳句指導を受ける
2013年　現代俳句協会入会
2014年　俳句集団【ｉｔａｋ】参加
2016年　雪華俳句会入会
2021年　俳句同人誌アジール　創刊同人
2023年　俳句同人誌ペガサス入会　同人

すこし後ろ

Ｆよしと

探梅の帰らぬ人が紛れ込む
知恵の輪の春のあたりが解けない
さくらんぼ君の休のとおり道
運命のすこし後ろをかたつむり
海霧の街人に懐かぬ犬のいて
盛装の額に涼し巫女の鈴
白靴の輝くごとく汚れけり
透明になるまで揺れて夏休み
空蟬の或る骨格の多面体
冷やし中華テレビの下のひとり席
端居して地球の過去をつまみ出す
鐘戸のゆるき隙間や秋日差し
公園に朴訥な場所秋の水
水澄むや老人たちの喉仏
家族との隙間を埋めて冬支度
行間に微量の皮肉星月夜
セーターの仮の姿の器かな
石膏の裸体大きく冬日向
冬の駅無形の薔薇を追いかける
冬林檎街の匂いを遠ざけて

令和６年度　第25回　中北海道現代俳句賞一次選考結果

番号	作品名（作者名）	五十嵐秀彦	石川美智子	齋藤雅美	瀬戸優理子	松王かをり	点数
3	すこし後ろ（Ｆよしと）			○	○	○	3
5	石ころのうた（古川　和）	○		○			2
6	岬　端（村　一草）		○			○	2
9	青空の微塵（近藤由香子）		○	○		○	3
11	薄　光（坂本眞紅）	○	○				2
15	妄想日記（高畠葉子）				○		1
17	尾　骶　骨（増田植歌）				○		1
22	実の爆ぜて（青山酔鳴）	○					1

選考経過

選考委員長　齋藤雅美

一月二十六日、かでる2・7において選考委員五人全員の出席のもと中北海道現代俳句賞の選考委員会を開催した。今回の応募数は二十二編で昨年の十四編と比較し大幅に増え、選考委員として応募者の方々の熱量を感じると共に多くの佳品に出会える期待も抱きながら選考を行った。

選考にあたっては、事前に一次選考として全選考委員が選んだ三編を集計し、その結果を踏まえながら各委員が推薦した三編や次点の作品等について評価の高さや問題点など詳細に論評した。二十二編のうち頭抜けた評価の作品はなかったが、それは優秀作品が無いということではなく、今回の応募作はレベルの高い作品が多いため評価が分かれたと解釈すべきである。

二十二編から一次選考で委員に選ばれた作品は八編であった。一人一点の配点として、三点が「すこし後ろ」「青空の微塵」、二点が「石ころのうた」「岬端」「薄光」、一点が「妄想日記」「尾骶骨」「実の爆ぜて」という結果であった。この八編について点数の多寡に関わらず更に時間をかけて議論を深め、最終的に「すこし後ろ」「岬端」「青空の微塵」「実の爆ぜて」の四編が残った。

この四編から最優秀作を決定すべく、各委員が一位から四位まで順位付けし、一位を四点、二位を三点、三位を二点、四位を一点として配点し集計した。その結果、十六点が「すこし後ろ」、十三点が「岬端」、十二点が「青空の微塵」、九点が「実の爆ぜて」となり、最高点の十六点を獲得した「すこし後ろ」を全員の合意を得て受賞作とした。

作者はFよしとさんで、九回目の挑戦で栄誉に輝いた。

（さいとう・まさみ　秋・秋さくら）

大混戦！

五十嵐秀彦

今回は一次選考の段階でかなり評価が散った。選考会で内容についてそれぞれ論じる中で、各委員ごとに特に推す作品が違っていることがわかり、まとめるのがかなり難しい状況となる。

私は一次選考で、「石ころのうた」「薄光」「実の爆ぜて」の三作を推薦。中でも㉒「実の爆ぜて」が群を抜いていると感じた。次の句に注目した。

実母とはどんなかたちの軒氷柱
初夏の鈍行は煙雨を北へ
形代にうつさぬままの罪のこと

このあたりがとりわけ秀句であると思った。詩的飛躍とその背景にある抒情性という点で群を抜く完成度と評価したい。

⑤「石ころのうた」では、次の句にひかれた。

熱く熱く鶏頭の種たなごころ
入口に擬態の蟻をり計音あり

⑪「薄光」では、次の句あたりであろうか。

鶏つぶす女房留守の盆用意
寒林のカフェ縦書きの別れうた

選考委員のそれぞれの推す作品が別れたままに四作が最終選考対象となり、結果は③「すこし後ろ」が一番の得点を得た。

探梅の帰らぬ人が紛れ込む
運命のすこし後ろをかたつむり
冬の駅無形の薔薇を追いかける

この句などがすぐれていると感じた。

⑥「岬端」の作品ではどの句も非常にうまいと感心させられた。

海へなだるる夏草も日月も
毛糸編むときに人生をまちがへて
その奥に灯あり家あり冬木の芽

破綻の無さがかえって物足りなさでもあったのが残念。

⑨「青空の微塵」もレベルの高い句が多かった。

大綿をこの世に降ろし霊柩車
母とゐて母のしづけさ薄暑光
折つても折つても鶴とべず八月

やや類想の気になる句があったことや、「わたし」「わたくし」の多用が気になった。

ともあれ検討の俎上に上がった作品はどれも一定のレベルを超えており、最終的に最も得点した「すこし後ろ」を受賞作とすることに異論はない。

決定後に作者が分かって、今回は特に実力者が競い合うレベルの高い応募作であったことが分かった。難航したことにも納得がいく。また、今回の二十二篇の中に初応募の作者が六人もいたことは実にうれしいことであった。

Fよしとさん、応募九回目での受賞、おめでとうございます。

（いがらし・ひでひこ　雪華・アジール）

選考を終えて

石川　美智子

令和六年度中現代俳句賞にはFよしと氏の「すこし後ろ」に決定した。おめでとうございます。

一次選考では次の三篇を選んだ。

⑨「青空の微塵」　近藤由香子

逝きてなほ残るこゑあり冬の星
駅前の書肆は平積み獺祭忌
紙漉の水いちまいに透く暮色

自分の中の強さと弱さを認め凝視し言葉を紡ぐ。それを直裁に開いてみせる。その心意気に感銘。これからも一句目の「残るこゑ」に背を押されての作句の道であろう。静謐でありながら自己愛に満ちた句群と言えよう。共鳴句が多かっただけに「私」の多用は気になった。

⑪「薄光」　坂本　眞紅

コーンスープ缶底に秋思二粒
寒林のカフェ縦書きの別れうた
日記買う嘘をつく場所また一つ

一連の作品から一つの楽曲が聞こえてきそうな錯覚を覚える。平易な言葉の流れではあるが作者の丁寧な暮らしぶりが見え好感をもった。一句目の缶底に光るコーンの粒に心を遊ばせる。「秋思」の季語がやわらかく効いている。

⑥「岬端」　村　一草

お煮〆を濃く煮て島の墓参り
稲雀大雪山は定位置に
鳥渡る壁画の鳥となれるまで

大きな景に抱かれゆったりと俳句に向き合う。自然への憧憬と地に足をつけた生活がある。お煮〆を濃く煮る知恵、大雪山に見守られている安心感、「壁画の鳥となれるまで」の描写力。内包している感性や言葉の数々が次の出番を待ち健康な俳句を詠むのであろう。

その他注目した俳句を挙げる。

Fよしとさんの〈運命のすこし後ろをかたつむり〉、古川和さんの〈誰にも内緒柚子坊を匿えり〉、及川和弘さんの〈風花や忘れやすくてわすれもの〉、増田植歌さんの〈十指みな乱れてゐたり芒原〉、木下小町さんの〈後ろ指さされることも冬林檎〉などに惹かれた。

新しい俳句、新しい詠み方への挑戦がみえ楽しませて頂いた。それだけに二十句を揃える努力も必要と感じた。

（いしかわ・みちこ　帯俳句会）

選考所感

齋藤雅美

応募作の選考においては独創性、現代性、抒情性、更に正確性や二十句全体としてのバランスも含めて評価を行い、最終的に俳句としての完成度と魅力の大きい以下の三編を一次選考の作品とした。

③「すこし後ろ」　F　よしと

知恵の輪の春のあたりが解けない
運命のすこし後ろをかたつむり
水澄むや老人たちの喉仏

解けない知恵の輪は春愁の暗喩か。似た言葉に秋思があるが知恵の輪の軽やかさは春だろう。運命に翻弄されるのは人の常だが、かたつむりは「運命のすこし後ろ」を行くという。作者の世の中とのスタンスが仮託されたような諧謔の一句。飲食の際に喉仏が正しく機能しないと誤嚥になる。季語の水澄むの効果か、老人たちの喉仏は活き活きと動いているようだ。日常の様々な場面を清新な感覚で捉えた句が多く、俳句の骨法を備えた文体に現代的な詩情が調和した作品である。

⑤「石ころのうた」　古川　和

秋蝶の前のめりなる死の容
虫籠は空淋しさを飼ひ慣らし
枯ひまわり折る形に長き影

前のめりに死んだ秋蝶は死に急いだのか生き損なったのか。生き様を問うような、カタ

ルシスも感じられる句。虫のいない淋しい虫籠に淋しさを飼い慣らすというトリッキーなレトリックは意外に心に沁みる。長い影を引く枯ひまわりに見た祈りは全ての命に対する祈りだろうか。ウクライナへのシンパシーとるのは幸強付会に過ぎるだろうか。花や虫を手掛かりに心情を吐露した印象深い句が多く、まとまった読みやすい作品だが、言葉の選択に疑問のある句もあった。

⑨「青空の微塵」　近藤由香子

逝きてなほ残るこゑあり冬の星
噴水のかたちをさがす少年期
青空の微塵に秋のしじみ蝶

親しい人が亡くなり星となった。その喪失感が幻聴のような声の記憶に託される。人格形成途上の少年の煩悶は形を変え続ける噴水に象徴され、一方で噴水は爽やかな未来を暗示している。澄み切った青空の一部が微塵に砕けたと思った刹那、しじみ蝶が見えた。空の大景と微小なしじみ蝶との取り合わせが鮮やか。一人称代名詞の表記が気になったが、自身と家族をモチーフとした句が多く、さらりとした抒情が特徴の作品である。

応募作はいずれも現代俳句としてのオリジナリティーを追求する姿勢があり好感を覚えた。最終選考の結果、一次選考の三編のうちのひとつ「すこし後ろ」が受賞したことは喜ばしく、お祝い申し上げたい。

（さいとう・まさみ　秋・秋さくら）

評価の難しさ

瀬戸　優理子

今回の応募作は二十二編。異なる作風、多彩な意図、感情を持つ作品群を同じ地平に並べ評価するという作業は容易ではなく、かつエネルギーの要することであった。

一次選考は悩んだ末に、次の三篇を選出。

③「すこし後ろ」　F　よしと

知恵の輪の春のあたりが解けない
運命のすこし後ろをかたつむり
海霧の街人に懐かぬ犬のいて
水澄むや老人たちの喉仏

格別、強烈な言葉を用いたり、挑戦的な書き方をしたりということはないが、どこか素通りできない「残像」を刻印される作品群。手ざわりのある実景を置きながらも、少しの虚構を紛れ込ませ、虚実の裂け目にそこはかとない詩情が漂う。成功の要因はタイトルにもあったと思う。タイトル句である二句目の「運命のすこし後ろを」の措辞は秀逸。見えない「運命」を可視化、「かたつむり」を自身の分身のように登場させ実存の不確かさを突く。中には予定調和な抒情で終わる句もあったが、全体の魅力を損なう程ではなかった。

⑮「妄想日記」　高畠　葉子

三月のメトロに土の匂い立つ
戦争の発作は続く大根引く
分断の世に梟と友のいて

「俳句は現代を映す詩でありたい」というスタンスが明快に感じられる意欲作。二句目の「戦争の発作」と「大根引く」の二物衝撃は今回の応募作中随一の傑作と感嘆した。やや言葉が先行している印象なので、書き急ぎせず視線の深化を待った句を読みたい。

⑰「尾骶骨」　増田　植歌

耳たぶのあたたかきとき囀れり
深く吸ふ舌先あれば百合にほふ
十指みな乱れてゐたり芒原

二十句のどこかに体の部位が詠み込まれた統一テーマを持つ一連。読み手の五感に訴え、「体感」を再現させる書き方が巧い。視点は良いが、副詞や形容詞によって説明的になってしまった句が散見されたのが惜しい。

この他に、〈鉛筆を立て十六夜の木の気持ち〉（酒井おかわり）〈ダケカンバ秋が執事のやうに佇つ〉（村一草）〈小児科医どんぐり次々貢がれる〉（坂本眞紅）〈みどりさす動物園に献花台〉（横山航路）にも注目。

最終候補作四編について決戦投票の結果、当初より一位に推していたFよしとさんの「すこし後ろ」に受賞が決定。九回目の応募での栄冠、おめでとうございます。

賞への応募は自作を見つめ直す有意義な時間。臆せず、気軽にチャレンジして欲しい。

（せと・ゆりこ　ペガサス・豈）

選考所感

松王　かをり

応募数は、前回の十四編から二十二編に増え、選考後にわかったことであるが、初めて応募してくださった方が六名もいらっしゃったことは、とても喜ばしいことである。お礼を申し上げたい。それに伴って、個性的な作品が揃い、なかなか選考が難しかった。まずは三編を選ぶ一次選考で、私は、「すこし後ろ」「岬端」「青空の微塵」を選んだ。

⑥「岬端」　村一草

荒海霧の漂着物として臥しぬ
海へなだるる夏草も日月も
ダケカンバ秋が執事のやうに佇つ

一位に推すことに決めて選考会に臨んだ作品。一句目、「漂着物として臥し」ているのは、作中主体であろう。自らを「漂着物」と感じる感性が、「荒海霧」と激しく響き合っている。二句目、下五の「日月も」で詩に昇華させた。三句目、「ダケカンバ」の立ち様を「執事のやうに佇つ」と比喩で表現したのだと最初は思ったが、いやそうではない。「秋」という季節、さらにいえば「時間」そのものが、ダケカンバに「執事のやうに」寄り添っているのだと気づいた時、この句が胸に迫ってきた。読み応えのある二十句だと私は思った。

③「すこし後ろ」　F よしと

透明になるまで揺れて夏休み
水澄むや老人たちの喉仏

受賞作となった作品。一句目、ハンモックや音楽で物理的に揺れているのか、あるいは精神的な揺れなのか。いずれにしても、自分を空っぽにしたいという思春期の心情を巧く一句に仕立て上げた。二句目は、老人の「喉仏」に焦点を当て、「老い」を浮き彫りにした一句。「水澄む」の季語が、その老いをいっそう際立たせている。日常のなにげない場面に光を当て、それを詩に昇華させようとする姿勢を評価した。ご受賞おめでとうございます。

⑨「青空の微塵」　近藤由香子

母とゐて母のしづけさ薄暑光
紙漉の水いちまいに透く暮色

右のような句に注目した。一句目、季語の「薄暑光」が効いている。二句目、手練れの詠みぶりである。ただ、二十句中に、「わたくし」「わたし」を使った句が三句もあり、句の構成に少し疑問が残った。

右の三編以外では、「妄想日記」の〈戦争の発作は続く大根引く〉、「がらんだう」の〈爽やかに信者は教祖生み出せり〉などに注目した。

（まつおう・かをり　銀化・雪華）

〈第35回北北海道現代俳句大会〉

1	日時	令和7年4月20日（日）13時より
2	会場	ときわ市民ホール　旭川市5条通4丁目
3	会費	大会費：1,000円　当日支払
4	講演	篠 朱子氏「猿貴ノート（仮題）」
5	講評	特別選者他
6	出句	受付終了・ご出句に深謝いたします
7	問合先	〒078-8320 旭川市神楽岡10条1丁目2－2 加藤ひろみ　Tel. 0166-65-0820
8	懇親会 会費	レストラン　りっか亭（予定） 5,000円（予定）

中北海道現代俳句賞応募について
組織活動部顕彰係からのお願い

◎応募用紙と作品用紙の記入欄の書漏れやチェック欄の☑漏れにご注意ください。

◎作品を郵送の際には入れ忘れのないように、応募用紙と作品、応募料を再度ご確認ください。

以上よろしくお願い申し上げます。

追悼・辻脇系一氏

昭和 12年　奈井江町生まれ
昭和 29年　「氷原帯」入会
昭和 40年　同人誌「鮫」創刊同人
昭和 45年　同人誌「潤」参加
昭和 47年　渦賞
昭和 48年　同人誌「海程」参加
平成 元年　句集「ゆるやかな昼」
平成 2年　北海道現代俳句賞
平成 5年　中北海道現代俳句協会会長
平成 6年　札幌市民文化奨励賞
平成 10年　第51回現代俳句協会賞
令和 6年　7月12日没・享年87

中北海道現代俳句協会顧問
現代俳句協会名誉会員

※当会報『礎』欄は、氏の揮毫をいただいて始まったものです。

十句抄

大方は素足の時間奈良飛鳥
鶏頭のあったところがまだ紅い
まっしろな国になるまで牛を押せ
子午線を通る近道大花野
ジュラ白亜秋は鉄骨高く組む
めし炊けて梅も桜も遅れがち
吾が骨は二百と六個葦を刈る
秋は空から体のかたち太古から
白鳥まで十歩妻までは百歩
牡丹ひとつ命ひとつの容かな

Fよしと（アジール）抄出

詮無いことながら

中北海道現代俳句協会会長　五十嵐秀彦

訃報は思わぬところからやってきた。北海道文学館のNさんから電話があり、「辻脇先生が亡くなったって、知ってましたか」。「え？」。「いましがた奥様とご長男様がご挨拶にいらっしゃって…」。ただただ絶句してしまった。「私、泣いてしまいそうです…」。いつも元気なNさんが消え入るように呟いた。亡くなってから一週間ほど過ぎていた。明るくおおらかで、弱った様子は微塵も見せず、「まいったよお」と言っている時でさえ少しも気弱には見えない辻脇さんだった。だから訃報は唐突に思えた。七月の夏の日のことだった。

辻脇さんの思い出として何を書いたらいいだろう。さまざまなことが心に去来するばかりで決めかねる。

私には三人の恩人がいる。と、これまで言い続けてきた。三人のうち黒田杏子先生と深谷雄大先生は俳句の師であり私を俳人として育ててくれた恩人、そして三人目が辻脇さんだった。辻脇さんが中現俳の活動を通して北海道の俳句界に私を導いてくれた。その存在がなければ、私はとても孤独だったと思う。身近に多くの頼りになる諸先輩、友人との関係を作ってくださったのが辻脇さんだった。言葉では言い尽くせない大恩があるのだ。

北海道文学館へ導いてくださったのも、細谷源二について教えてくださったのも辻脇さんだった。そして何より現在の中現俳があるのには、前会長の辻脇さんの存在が実に大きい。組織として常にどの方向を向けばいいのかを指し示してくれるかけがえのない存在だった。心残りは多々あるが、細谷源二のことをもっと教えていただくべきだったという悔いが残る。後悔先に立たず。言っても詮無いことながら。

（いがらし・ひでひこ　雪華・アジール）

四十五年前の列車の中で

北海道俳句協会会長　田湯　岬

もう四十五年も昔のことですが、出張帰りの列車で「鵡」を開いていると、偶然隣の席に座った人が、声をかけてきて、現代俳句について熱く語ってくれました。下車するとき、辻脇系一と名乗り、私の名前を覚えておくと言ってくれました。当時は、細身で背の高い人だったと記憶しています。

それから三十年ほど経ち、私が北海道俳句協会の事務局次長に推薦された時、異議を唱えようかと思ったが貴方だったので、と笑ってくれました。

辻脇さんは、若い俳人を見ると誰にでも話かけ、その芽を伸ばすことに生涯をかけた人でした。それが現在の中北海道現代俳句協会の活力として、確実に育って来ました。その御功績に感謝するばかりです。

（たゆ・みさき「道」主宰）

先生を偲んで

中北海道現代俳句協会顧問　永野　照子

先生のご逝去は北海道俳壇のひとつの時代が終わった感を深くした。まさに北辺の巨星堕つ、であった。講座や句会には、その作品と深く温かい人間性に魅かれ多くの人が参加した。

先生のお声を最後に聞いたのは四年の春と思う。月見草の種が欲しい、という電話であった。当時先生と四方さんと私は、その頃日本でも育ち初めた白い花の月見草を見たかった。幹事会の夜の事、三人は偶然歩道の花壇で見つけ幸運を喜びあった。一本を抜き取り一頻りはしゃいだ後しゅんとした。長い事育てて我々はもう贖罪を果たしたね、共犯者も悪くなかったね。と電話の中で先生は笑われた。二十五年後の今年の正月、眼に痛いほどの白い花が家の中で咲いた。

先生も四方さんももういない。深悼

（ながの・てるこ）

表現の浄化

北海道俳句協会常任委員　信藤　詔子

「系ちゃんねー、氷原帯に入った頃、諸襟の学生服姿でねー」と、先達から紹介していただいた時、既に師は氷原帯を離れていた。再び親交を深められたのは、鈴木光彦主宰になってかららしい。

ある宴席のこと、テーブルの箸袋に「カタルシス」と書き、表現の浄化について語られた。当時、渦賞作品や『ゆるやかな昼』は難しく実感できないでいたが、現代俳句協会賞の作品では「変。句集など読み返すと精神世界が通底しているこに気づく。「俳句と言う詩への一筋の思い」と、書き残されているように詩精神は最期まで一貫していたのだ。風土と人間に執着し、繊細かつ大らかな表現に感動はやむことはない。

「やあ」とにこやかに手を上げ、ゆっくり歩いてくるお姿が浮かぶ。

（しんどう・しょうこ　氷原帯同窓会）

辻脇系一先生との思い出

中北海道現代俳句協会組織活動部　鹿岡真知子

辻脇先生は私にとって新妻博先生に続く二番目の先生で、その出会いは新妻先生から「僕が一番信頼する人」と紹介された三〇年余り前になります。

一見人当りがやわらかく自由に句を作らせてくださいましたが、実際は頑固に句と向き合う厳しい先生でした。

NHK教室・羊の会・木の会と教えをいただき、何度かの入院中はスマホで羊の会の添削を、一句一句丁寧に摺合せをしてくださいました。幾度もの入院でも元気に退院し句を作っていた先生。訃報を受けたときはショックでショックで。

わたしの好きな先生の句を挙げて、ご冥福をお祈りします。

野に家族風に溶けだす汽車があり
寝るまでに桜大きな樹になって
遠ざかる昭和雪野に草の骨

（しかおか・まちこ　ロマネコンテ）

礎

永田耕一郎

略歴　大正七年～平成十八年、享年八九。樺太木浦市生まれ。十六歳より作句。昭和十三年より金子麒麟草に学ぶ。昭和二二年北海道の豊富町に引き揚げ、同年「寒雷」に所属。四九年同誌の清山賞を受賞。五五年「梓」創刊主宰。句集『氷紋』『海耕』に続く『方途』により北海道俳句協会鮫島賞を受賞。その後『雪明』『遥か』を出版。『遥か』により北海道新聞俳句賞を受賞。著書に「北ぐに歳時記」。

一本の棒ぞ早に佇ちつくす
牡丹雪時をゆるめることく降る
行く雁の折れてカタカナばらばらに
白鳥の首が行き交ふ靄のなか
死後も目はある苦雪を見てゐたり

「百鳥」　久保田　哲　子　抄出

依田明倫

略歴　昭和三年～平成二九年、享年八九。奈井江村生まれ。昭和二三年高浜虚子に師事。昭和五七年北の虚子忌・北の年尾忌企画開催、現在に至る。昭和六二年日本伝統俳句協会設立発起人、北海道支部会報「雁信」創刊。平成十二年まで北海道ホトトギス会会長。平成四年同人誌「夏至」創刊。平成七年高浜年尾全集編集委員。平成十四年～二〇年北海道新聞俳句賞選考委員。平成二五年第四句集「農場」にて第三四回鮫島賞。

ずいとあぐ重みいしかりかはなまづ
無蓋貨車暮遅き雨のしぶきあぐ
半月の斧と落葉と水車番
がつたんと年越す寝台車の中で
熊番のごろり一畳畳かな

「夏至」主宰　佐藤宣子　抄出

〔青のフロント十二月〕佳句抜粋

冬眠に入れぬ熊街走る　石本雪鬼
雑炊の一糸まとはぬ卵かな　増田植歌
タクシーはゆりかご揺れて師走の夜　ただすみれ
蒼くとも雪は食ふなと言うただろ　村瀬ふみや
組板にさがすふるさと干菜かな　風花まゆみ
椋鳥の群れの器用に有楽町　Fよしと
窓の雪部屋に三つの置時計　五十嵐秀彦
あなかしこししむらつんでお喰積　近藤由香子
冬の虫ついの住処が充電器　中本伸一
雪吊や禁則処理として恋は　青山酔鳴

〔青のフロント　二月〕佳句抜粋

まず揺すり吹いて眺める種選び　中本伸一
ヘルシンキ花生けられた明かり窓　石本雪鬼
焦点のあはぬ天窓朧月　風花美絵
人の背と下ばかり見て雪まつり　風花まゆみ
白和へに小松菜の碧春浅し　中村みずほ
沫雪の訪ふドーマーの小窓　青山酔鳴
春を待つ夜の数ほど詩を書いて　五十嵐秀彦
散る時も飼い慣らされて落椿　Fよしと
雪の緞帳息できぬほど重し　林　冬美
第三志望北海道の雪女　石井美舞
雪の果小鳥もだれも来ない窓　梨山碧
言霊の宿るが如き春の雪　増田植歌

青のフロントご案内

日　時　偶数月第二土曜日午後一～四時
会　場　かでる2・7　当日参加可
席題有　当季雑詠三句
問合先　五十嵐秀彦
TEL　〇一一-八五二-七〇一四

会員以外の参加も歓迎します。皆様お誘いあわせの上お越しください。

令和７年度中北海道現代俳句協会「俳句研究交流句会」のご案内

〈 事前投句とし、当日は選句・選評に十分な時間を割きます 〉

1 日　　時　令和７年８月30日（土）　受付開始11時30分・開会12時・閉会15時40分ころ
2 会　　場　かでる２・７　520研修室　札幌市中央区北２条西７丁目　℡ 011-204-5100
　※昼食は各自お済ませ下さい
3 出句締切　令和７年８月15日（金）消印有効
4 会　　費　1,000円（当日受付・学生無料）
5 問 合 先　組織活動部　鹿岡真知子　℡ 011-694-6075
　または事務局　Ｆよしと　℡ 011-641-1007
6 送 付 先　〒005-0022　札幌市南区真駒内柏丘1-6-7　近藤由香子　℡ 011-584-0234

第34回 中北海道現代俳句大会のご案内

1 日　　時　令和７年４月６日（日）13時より
2 会　　場　かでる２・７　710会議室　札幌市中央区北２条西７丁目１　℡ 011-204-5100
3 会　　費　大会費：1,000円　当日受付にて申し受けます（学生無料）
4 講　　演　古家昌伸氏（北海道芸術文化アーカイヴセンター代表／事務局長）
5 演　　題　「俳句年鑑を読む～アーカイヴの愉しみ」
6 講　　評　主要作家数氏
7 大会出句　受付は終了しています・多数のご出句に深謝いたします
8 問 合 先　〒004-0864　札幌市清田区北野４条１丁目10-1
　　亀松澄江　℡ 011-882-1739
9 懇 親 会　札幌ガーデンパレス（中央区北１条西６丁目）にて午後４時半から
10 懇親会費　6,500円（予定）　※大会受付にて申し受けます
　　※懇親会のキャンセルは当日３日前までとし、連絡無き欠席の場合は会費を頂戴します

◆ なお当日は第25回中北海道現代俳句協会賞の顕彰も併せて行われます ◆
◆ お飲み物は各自ご用意くださるようお願いいたします ◆

幹　事　会　報　告

R7.1.16（木）かでる2・7　610会議室

1 令和７年度総会及び新年交流会（事務局）
2 第34回中北海道現代俳句大会（事業部）
3 第25回中北海道現代俳句賞（組活部・顕彰係）
4 三役・顧問・選者の会（事務局）
5 会報103号（広報部）
6 その他／会員動向他（事務局）※出席者15名

R7.3.20（木）かでる2・7　610会議室

1 第34回中北海道現代俳句大会（事業部）
2 第25回中北海道現代俳句賞（組活部・顕彰係）
3 令和７年度 俳句研究交流句会（組織活動部）
4 会報103号・104号（広報部）
5 「一人一句集2025」（広報部）
6 その他／会員動向他（事務局）※出席者15名

一般社団法人　現代俳句協会　入 会 の ご 案 内

（一社）現代俳句協会では、多くのみなさまのご入会をお待ちしております。
ご家族・ご友人にも是非ご紹介ください。

入会金・年会費など事務局までお問合せください。

中北海道現代俳句協会 会費納入のお願い

当会年会費2,000円の納入は振込です。手数料もご負担下さい。口座番号は以下です。
02780-9-48961

中北海道現代俳句協会　入会のご案内

当協会にはお住まいの地域に関わらず入会頂けますが、その際上記（一社）現代俳句協会の入会が必須条件です。ただし他の地区協会にて既に（一社）現代俳句協会会員となっている場合、重ねての入会は不要です。不明点は事務局にお尋ねください。

第34回 北海道現代俳句大会のご案内
（東北海道現代俳句協会主管）

◇日　　時　令和７年６月８日（日）12時半開場・13時開会　大会参加費　1,000円
◇場　　所　釧路センチュリーキャッスルホテル２階・鶴の間（釧路市大川町２-５）
℡ 0154-43-2111
◇講　　演　五十嵐秀彦氏（中北海道現代俳句協会会長・俳句集団【itak】代表）
◇演　　題　「飛ばない鳥は飛べない鳥～俳句を＜読む＞ということ～」
◇講　　評　特別選者及び地区協会会長
◇応募規定　２句１組 1,000円　（新作未発表作品に限り何組でも可・前書不可）
所定用紙（コピー可）または200字詰原稿用紙使用　投句料は作品に同封のこと
◇応 募 先　〒088-0612　釧路郡釧路町雁来１-34　　西村奈津方　℡ 0154-36-7823
◇出句締切　令和７年４月15日（火）必着
◇懇 親 会　大会後同ホテル１階・海の間　懇親会費　6,000円（当日受付にて）
キャンセルは６月２日まで（連絡なく欠席された場合は会費を頂戴します）

◆ 上記ホテルの宿泊のご相談をお受けします ◆

事務局便り

事務局長・Ｆ よしと

本年は暖冬、小雪と過ごしやすい一年の始まりでしたが、この号の準備中は年間降水量の辻褄を合わすように大雪が続く毎日です。

さて、二月一日の総会には多くの会員のみなさまにお集まりいただき、例年通り予算関係と新たな役員人事についてご承認をいただくことが出来ました。たいへんありがとうございます。内容についてはこの会報の会計資料と報告記をご覧ください。

前年度の各俳句団体の集まりでは会員の減少が大きな問題となっていました。当協会も同様ですが、お陰様で「俳句カフェ」などの催し物のあと、新会員の入会が数名ありました。みなさまには今後も引き続き俳句の魅力をお話しいただき、新人入会のお誘いをお願いいたします。

本年も四月の大会、八月の俳句研究交流句会など具体的に準備を進めています。多くの方々にご参加いただきたく、どうぞよろしくお願いいたします。

また二月初旬に一般法人「現代俳句協会」より会費の納入と本部総会の案内が届いていると思います。なにとぞご入金と、総会の葉書のご返送をお願い申し上げます。

編集後記

広報部・青山 酔鳴

二月の総会にて役員改選があり、副会長が交代しました。石本雪鬼さん・亀松澄江さんには五十嵐会長の現体制を牽引して頂きました。思えばそれをなにくれとなくバックアップしてくださったのも前会長の辻脇系一さんでした。時代はどんどん変わってゆき、俳句を取り巻く世情も、いいことばかりとは言えないような気がしますが、地声の聞こえる詩語を書き続けることを忘れてはいけないと、改めて肝に銘じるばかりです。昨年好評だった「俳句カフェ」をこの秋また開催する運びとなりました。次回発行の会報一〇四号にて詳細をご案内いたします。俳句研究交流句会とともに、多くの方が楽しめる企画となるよう、みんなで育てていきたいものです。

1日限りの

俳句カフェ

へどうぞ

中北海道現代俳句協会主催

2025年11月30日（日）

かでる2・7にて13時より開催予定

詳細は次号にてお知らせいたします